

解答と配点

| $\widehat{100} \boxed{1}$ |     |     |     |     |     |     |     | 問題番号<br>(配点) |     |    |  |
|---------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------------|-----|----|--|
| 8                         | 7   | 6   | 5   | 4   | 3   | 2   |     |              |     |    |  |
|                           |     |     |     |     |     | (い) | (あ) | (ロ)          | (イ) |    |  |
| (a)                       | (e) | (d) | (b) | (a) | (c) | (e) | (c) | (b)          | (c) | 正答 |  |
| 16                        | 12  | 10  | 12  | 10  | 16  | 6   | 6   | 6            | 6   | 配点 |  |

1 解説

1 (イ) 「幽閉」は、閉じ込めることを意味する。正答は(c)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、次のとおり。

- (a) 有終 (b) 憂慮 (c) 幽玄 (d) 優越 (e) 悠々  
(ロ) 「融合」は、とけあうこと、とけあって一つのものになることを意味する。正答は(b)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、次のとおり。
- (a) 誘致 (b) 融通 (c) 周遊 (d) 猶予(与) (e) 湧出

2 (あ) 「称」には、「ほめたたえる」、「揚」には、「高くあげる・ほめる」という意味がある。正答は(c)。「与」には、「あたえる」のほかに、「かわる」という意味がある。熟語だと「関与」「参与」のように使われる。正答は(e)。

3 — 線部(1)につながる本文の展開を確認する。 — 線部(1)の前二段落で、「じぶんたちが磨いたレンズを通して見る」＝「じぶんたちが磨いたレンズを通してしか見ることができない」とする考え方は、「じぶんが見ている世界の外に出られない」という主張になってしまふ、と述べた上で、 — 線部(1)の「どういふことなのか、よくよく吟味されねばならない」という内容につなげている。この展開から、筆者は前二段落で挙げられている考え方について、 — 線部(1)で疑問を呈し、再考が必要だとしているのがわかる。よって、筆者が疑問を呈している内容を述べ、それについて再考が必要と説明している(c)が正答。

4 空欄 a の前後から、次のような手がかりが得られる。

・ 空欄 a の前に「そういう〈同化〉の延長線上で」とあるので、〈同化〉の延長線上にあるものが空欄 a に入る。

・ 「そういう〈同化〉」とは、「同郷人、同国人、おなじ言語を話す人、おなじ宗派の人……といったふうに〈同〉が地球市民にまで拡げられ」の部分に見られるように、個人間に共通する性質を見出し、それをもとに同じ属性の人だとみなしていくことを言っている（なお、「同化」については後の設問7でも触れる）。

・ 空欄 a を含む文の文末と、その次の文の文末が、ともに「……というわけだ。」となっているので、この二文は同義か近い内容が繰り返されていると考える。

以上を踏まえて考える。正答は(a)。

5 他者との関わりについて、第五段落までとは別の見方が紹介されるのが、「これにたいして……よく反撥したのが、エマニユエル・レヴィナスである。」で始まる第六段落。レヴィナスの考えを紹介した後、「これをいいかえると」で——線部(2)につながっている。

——線部(2)の前後を含めて見てみると、「自他の関係をおなじ一つの始源からとらえることを可能にする」<sup>(2)</sup>特権的な平面は存在しない」となっているので、「自他の関係をおなじ一つの始源からとらえることを可能にする」ものは何か、筆者が「いいかえる」前の、レヴィナスの思想の部分から考える。レヴィナスにおいてそれは「自己と他者をとともに包摂しうる第三者」。その特徴を踏まえた上での立場の説明になっているのは(b)。

6 空欄 b の同段落内で「全体性の思考」は、「全体性の視点からとらえられた個人相互の関係は、個人にとってけっして他者との関係なのではない」「〈同化〉の操作のなかで措定されたもの」「人間を置き換え可能な存在と見る」などと説明されている。「個人にとって……他者との関係なのではない」とは、つまり「全体性の思考」においては「私≡あなた」だということである。一方で、「自己同一性」とは、「私が私であること」を指す。したがって、「全体性の思考」においては、「私≡あなた」であるために、私と他者(あなた)の関係は「私≡私」(自己同一性)と結局同じということになる。よって正答は(d)。

7 ——線部(3)に含まれる〈同化〉とは、どのような行いなのか。同段落内の説明を見てみると、空欄 b の少し後に「包摂や総合といった〈同化〉の操作」という表現が見つかる。「……といった」は、列挙した事柄をまとめる際に用いる表現。〈同化〉の一例が、「包摂」や「総合」ということである。「包摂」とは、「事柄を一定の範囲内に包み込むこと」、「総合」とは、「個別のものを合わせて一つにまとめること」である。——線部(3)は「〈同化〉の思考」なので、「包摂」や「総合」を行おうとする思考が説明されている選択肢を選べばよい。正答は(e)。

8 筆者が考える他者理解の過程は、最終段落にまとめられている。正答は(a)。

(b)は、「自他は理解しえないもの」が誤り。本文全体で他者理解の過程について模索しており、自他は「通約不能なもの(共通の分母をもたないもの)」とは述べているが、「理解しえないもの」とは述べていない。

(c)の「不等性を解消していくこと」、(d)の「同一性へと収斂していくこと」は、「全体性の思考」の説明であり、筆者の考えとは真逆。

(e)は「他者との関係は置き換え不可能な存在」が誤り。「置き換え不可能」なのは「他者」であり、「他者との関係」ではない。